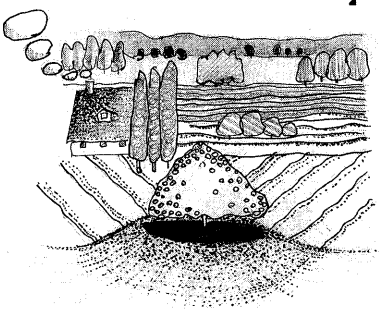
「住まい」のイメージ (1)

生活空間のドラマ
～体験的空間生活発達論～

西村　一朗

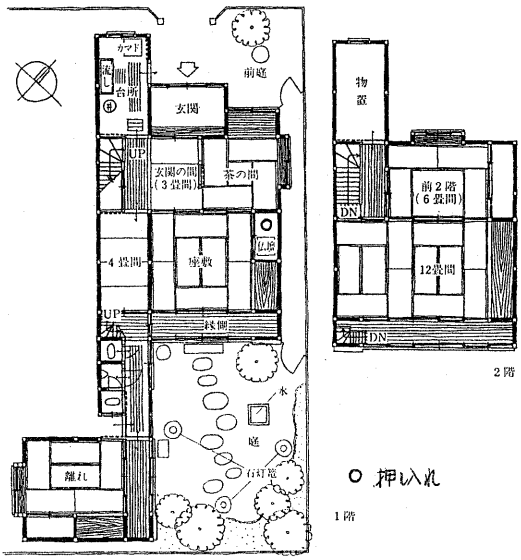


はじめに

私達にはっきりと記憶されている風景の最初は恐らく四歳前後のものではなかろうか。それ以前の出来事は、親等から教えられて、その気になっているにすぎない場合が多いだろう。だから、私も本稿では四歳位から始めて小学校に入るまで、つまり幼稚園までを振り返りながら住まいを中心に幼稚園にいたる空間生活（空間を使った生活）の様相を思い出して述べてみたい。同時に、その体験をもとにしつつ幼児のための生活空間のありかたについても少し考察してみたい。

最初の怖い体験

私が満四歳になったのは一九四五年（昭和20年）六月で、そのほぼ二カ月後に「終戦」となった。その直前、米軍のB29が富山を爆撃した時、金沢の上空を通った。その時、私は祖母と一階八畳間の押し入れに入り仏壇の横で防空頭巾を被って震えていた。その時の記憶は今も鮮明によみがえるである。祖母は念仏を唱えて「仏様、御先祖様が守ってくれる」と言っていたようだ。幸い金沢は歴史的都市ということで爆撃を免れたが、その時の体験が、その後大きくなってから狭く暗い空間で、か



▲ 私の生まれ育った家〔金沢〕
（取り壊されていて、現在はない）

えって落ち着く気分になるのに影響があると思っている。

子供の生活空間拡大過程

考えてみると私達は母親の子宮より生まれ落ち、母親の胸にかじりつき、やがてハイハイをし、立ち上がり段々と父親や兄弟姉妹の存在をも認識し、行動する生活空間も広がって行く。ベビー布団（ベッド）から部屋へ、部屋から住まい全体へ、敷地内から町内へ、そして町全体から更に広い空間へと広がる。それは子供にとっては初体験の連続である。そこでの体験は深く体と脳裏に刻まれるに違いない。従って、逆にその過程での生活空間のありようが子供の発達過程に大きな影響を及ぼすと言っても良いだろう。ここでは、私の体験に則して家から幼稚園までについて思い出して述べてみたい。

幼稚園以前の生活空間の広がり

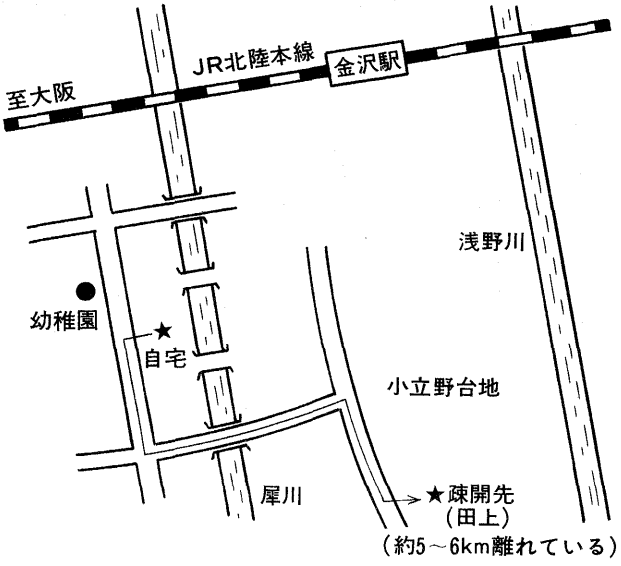
幼稚園までの私の主な日常生活空間は、家の前の通り―桜畠三番丁―内と言っても良い。もちろん、後で述べるように「疎開」で遠出したことも兼六園に行って記念撮影したこともあるが「日常」に限定すると桜畠三番丁が主な生活空間になるのである。ここで、それを象徴する出来事、私の「虫歯事件」について思い出したい。当時、一九四一年（昭和16年）～一九四五年（同20年）頃

は、私の両親は満洲に出掛けていて、私は母方の祖父、祖母に育てられていた。いわゆる「おばあちゃん子」であった。そこで「甘く」育てられたと言って良い。以下述べるのは戦後間もなくのことと思うが、物資が不足している中で祖父はどこからともなく色々な物を手に入れてきた。その中にチョコレート等があった。私は、それらを食べて当然ながら虫歯になっていった。それが徐々に進行して遂に我慢が出来ない位に歯が痛くなった。どうしても我慢出来なくて「おじいちゃ～ん、早く帰ってきて～」と泣き叫んだらしい。家の中だけではおさまらずに裸足のまま外に飛び出して、寺町の電車道まで来てしまった。丁度、桜畠三番丁の小路と寺町・電車道の境の所に立ち止まり、電車道に向かって叫んだ。日が西に傾いて真正面から私を照らしていたが、涙が目に溢れていたので、その太陽は目の中で「ぐしゃぐしゃ」に崩れていた。痛みと嗚咽は中々止まらず、祖母や桜畠角の魚屋のBさんが声をかけてくれても振り切っていつまでも泣きじゃくっていたのである。寺町の電車通りに出てしまうと当時の私としては生活空間に境がなくて何処まで行ったら良いか分からない、だから日頃遊びに出歩いて良く分かっている桜畠三番丁の町内が、当時少なくとも私の主な生活空間だったと思う。

「疎開」先へ歩き続ける

幼児期に桜畠三番丁を越えて一番遠くへ行ったのは、恐らく「田上」地区へ「疎開」した時ではなかろうか。「田上」とは私の住んでいた寺町台地から一旦犀川へ下り、そこから小立野台地に上がって、更に上流に行ったところで当時、金沢市内から見て「田舎」であった。現在は金沢大学が移転キャンパスを持つ地区で金沢市街地の端となっている。私の家から疎開先まで五～六キロメートルほどはあるのではなかろうか。大人の足では何でもないが四歳の子供にしたら「大変な」距離である。もちろん、祖父、祖母は私を歩かせようとしたのではなく荷車に家財道具と一緒に乗せて運ぼうとしたのは当然であろう。しかし、私は結局、歩き通してしまったの

だ。向こうに着いたら親戚の人が「さすが男の子、強い、感心…」と言うし祖父なども自慢気であったが、自分としても最初からそのつもりはなかったが、間が悪いことに最初に祖父が「乗ったら」と言った時に周りに同



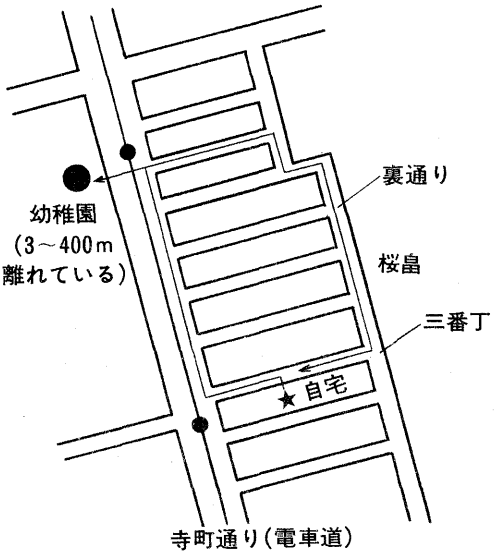
▲　自宅(桜畠三番丁)と疎開先(田上)との位置関係

年代の知り合いの子供たちが見ていて「弱虫と思われる恥ずかしさ」から我慢した。そのうちに「乗せて」と言えなくなって向こうに着いてしまったのだ。「恥の文化」の最初の実践的体験かな、と後に思った。

一年間、幼稚園に通う―主に電車道を通って―

私が一九四七年（昭和22年）四月より翌年の三月まで一年間通う幼稚園は寺町三丁目の電車通りに面した「金沢学園幼稚園」で曹洞宗の寺院経営であった。後に調べた記録によると私達は第17回修了生で一一七名いたのである。通園路は、桜畠三番丁から寺町二丁目の電車道に出て端（当時は明確な歩道なし）を歩いて三丁目まで行き向こうに渡って幼稚園の門にいたった。そこは桜畠の町内の並びで言えば九番丁と十番丁の間にあった。子供の足で二十分ほどであろう。最初は祖母に付き添われて通ったのではあるまいか。慣れて来て一人あるいは友達と連れ立って行ったのでは、と思う。祖母からは「電車に気を付けて」と言われていた位で、自動車は今のよう

にびゅんびゅん走っている訳ではなくたまに通る珍しい存在だった。帰りは、電車通りに並ぶ店をのぞきながら、特に玩具屋の所で時間をとって道草しつつ戻ったと思う。たまには後でも述べる「裏通り」を通って帰った。この過程、経験を通じて寺町通りにある店の種類や数、位置が頭にしっかり入ったのではなかろうか。又、友達の家の位置もある程度分かってきた。



▲　自宅と幼稚園(寺町三丁目)との位置関係

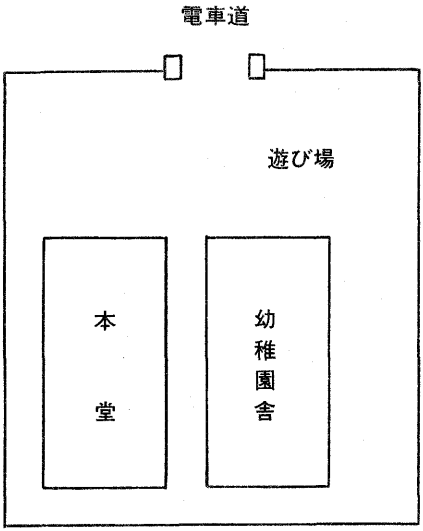
四月の「甘茶祭」

幼稚園が仏教系の経営だったので四月八日、入園して間もなく小さな仏像（お釈迦様）に甘茶をかける祭りがあった（と後の知識で分かった）。幼稚園の前庭に「お釈迦様」が置かれていたが順番にはっきりした意味も分からず面白いのでしきりと背伸びをして甘茶をかけていた記憶がある。一年間、色々と年中行事があっただろうが、これがいわば最初だから良く覚えているのだと思う。

天皇来沢と小旗振り

戦後すぐ天皇はいわゆる「人間宣言」を発して、全国行幸を始めたのである。金沢に現れたのは、記録によると一九四七年（昭和22年）秋の十月二十八日であった。兵舎跡地が引き上げ者住宅となっていた平和町や孤児収容施設の「亨生塾（きょうせいじゅく）」も訪問地とな

り寺町通りも道筋に当たっていたので私達園児も日の丸の小旗を持たされて歓迎のため園の前の通りに動員され並べさせられた。やがて左手の広小路、大桜方面より一行がやって来た。多分、先頭はオープンカーのジープでアメリカ兵が独特の帽子をかぶって乗っていた。続いて天皇の車であるが、これはオープンカーではなかった、と記憶する。（どうもベンツの御料車であったらしい）



▲　幼稚園舎と前庭のイメージ

全部で十台位続いていたのではなかろうか。私達は、先生の合図で一斉に小旗を打ち振ったのであるが、私は後ろの方で背伸びをして振っていた。しかし、ふっと「どうしてこんなことをするのだろう」と思ったのではないか。しかし、これは後で記憶を呼び起こした時の後知恵感慨であるかもしれない。

積木をK君の頭にぶつける―裏道を逃げる―

幼稚園内では積木などを使って遊んでいた。その中で後々まで苦い思い出となった「事件」を記しておこう。それは、私が積木を投げて、それがたまたま寺町二丁目の文房具屋の息子K君の頭にあたったことである。別に彼に怨みがあるわけでもなく、たまたま投げたものが彼にあたっただけである。彼の頭からたらたらと血が流れた。私は、仰天してこともあろうに幼稚園を裸足で逃げ出したのである。寺町の電車通りを逃げればすぐ分かるし追いつかれると思って幼稚園正門向かいの桜畠九番丁あたりから裏通りに回ってそこを通って家に戻ったので

ある。裸足だし血相変えているので祖母は「どうしたの
や」と厳しく聞くも無言を押し通した。しかし、K君を
怪我させたのは私、と分かっているのだから当然咎めを
受けなくてはならない。やがて先生がやってきて家人に
事情を説明し、私はこっぴどく叱られたのである。「K
君の傷は大したことはなかったけれども、家に送り届け
たから後で謝りに行きなさい」と先生から言われた。す
ぐ祖母とK君の家に謝りに行った。

鉄棒や砂遊び

外での遊びでは、鉄棒を使った遊びを覚えている。そ
れは大変怖かったからでもある。幼稚園の前庭、すなわ
ち寺町通りから入ったすぐの所が「おゆうぎ」の場と
なっていて鉄棒や砂場があったと思う。普通の鉄棒や
ジャングルジムの他に鉄の渡り梯子とも言えるものが
あったが、これに登って渡る時の「落ちる」かもしれな
い恐怖は今もはっきり思い出す。

ここで私の体験ではないが娘の保育園時代に見聞した
話を挿入したい。娘は私が京大に勤めていた頃、そこの
職場保育園である「朱い実保育園」に通っていた。そこ
の夏の人気遊びは「泥んこ遊び」で、子供たちが裸と
なって園庭に出、水と泥でそれこそ「泥んこ」になるも
のだった。ある先生に聞くと「冷たい水と泥は子供達に
人気があるが、何故かと言うと冷たい水や泥は子供達の
肌を気持ち良く刺激する上に、形が不定型で変化し、子
供達のイメージも刺激するから」のことだった。私は幼
稚園時代、そんな遊びはしなかったが海浜で泳いだり遊
んだ時の体験から「なるほど」と思ったものである。

卒園式の思い出

私は一九四八年（昭和23年）三月「金沢学園幼稚園」
を卒園した。その式の時、皆で写した記念写真があるが、それを見ながら思い出すことがある。これも「恥ずかしい」部類に入ることなのだが……。それは、私だけがネクタイをしていることである。時代が時代だから皆普通服で、女の子で着物を着ている子も数人にすぎな

い。私は、何故か「小紳士然」とネクタイを着用させられた。当然、「恥ずかしくて」しかたがない。その結果、写真でもはっきりするが、ネクタイを少し横にずらせて写真に写らないように工夫している。そのしぐさもはっきり記憶している。

おわりに―幼児空間生活と生活空間―

以上で私の幼稚園までの空間生活体験と生活空間について思い出すいくつかを述べたが、最後に「まとめ」をしておきたい。ここに思い出しを述べた体験は、後からみると「怖かったこと」「痛かったこと」「恥ずかしかったこと」などであり、普通の平凡な日常の体験は余り良く思い出さない。それは「記憶のメカニズム」から言っても当然と言えよう。それらは言わば幼児にとっては「強い」刺激と言って良い。こういう「刺激」を、意識して与えること経験させることは難しいし、必ずしも良いとは言えないが、体験からの私の気持ちとしては「出来るだけメリハリの効いた生活体験をさせる」精神が必要ではないか、ということである。

次に幼児のためにのみ生活空間を計画することは特別な領域を除いて難しいが、これ又、精神として言えることは第一に、幼児の目線に下りて大人も一度考え計画してみたらどうか、ということ。第二に、余り突っ拍子な「幼稚園」ではなく住まいの延長としてすぐにでも溶け込める空間が良いのではないか、ということ。(余りに独創的な形態の建築をつくったら子供が萎縮したという話しを聞いたことがある)第三に、「幼稚園」は大人が設計してつくるのであるが「未だはっきり物言えぬ」子供の反応を見ながら「共に創造してゆく」精神が大切ではないか、ということ。そして最後に、これは町づくりのことであるが、表通りも裏通りもあり、店も空き地もあり、といった「子供達が楽しく道草の出来る町づくり」が必要ではないか、ということである。

(奈良女子大学家政学部住居学科)